

生池城跡

戦国武将が日本の支配権を争っていた 16 世紀半ば、壱岐・五島を含む九州北西部を拠点に、武士であり、商人・海賊でもあった松浦党が活動していた。彼らは朝鮮半島との貿易や海賊行為、日本本土での商売を行い、大きな利益を得るとともに、ある程度の政治的な独立も果たした。

松浦党の有力者の一人は壱岐の源壱であり、島の中央部の丘陵に生池城を築いたとされる。この城は、最後の砦として設計されたもので、常時は人がいなかったと思われる。本丸は 150×100 メートルの平坦な土地で、三重の土塁と二重の空堀で守られていた。堀にかかる狭い土橋は計 4 か所あり、上から狙いやすい狭い場所に敵をおびき寄せるために、目立つように作られていた。

堀と土橋は現在もほぼ完全な形で残っており、丘の上では城壁の一部を見ることができる。城跡は近くの駐車場から徒歩で簡単にアクセスできる。